

がんの痛みを救おう！

—「WHO がん疼痛救済プログラム」とともに

武田文和 著

柏木哲夫(大阪大学大学院教授／淀川キリスト教病院名誉ホスピス長)

1981年以來、がんは日本人の死因の第1位を走り続けている。年間約30万人が、がんで死亡する。その半数以上が、痛みの治療を十分受けていないと言われている。がんに伴う苦痛は痛みだけではない。悪心、嘔吐、呼吸困難、全身倦怠感なども多くのがん患者を苦しめる。しかし、痛みは発生頻度が高いこと、長期にわたって患者を苦しめることから、その治療は緩和医療の中心をなすものである。

がんの痛みの治療は全世界的な関心事であり、1986年にはWHO方式がん疼痛救済法が公表された。WHOの研究結果によると、がん患者1人あたりのモルヒネの消費量とその国のがん疼痛のコントロールの程度が比例するという。言い換えると、モルヒネの消費量の少ない国のがん患者は、痛むということである。

国際麻薬統制委員会の調査によると、1日あたりのモルヒネ消費量のトップはオーストラリアで、カナダ、イギリス、アメリカと続く。上位はすべて西洋諸国で、日本をはじめとする東洋諸国ではモルヒネの消費量は少なく、ここでは西高東低である。ちなみに1997年の消費量をみると、日本はオーストラリアの約8分の1に過ぎない。日本のがん疼痛対策は、まだまだということが言える。しかし、ここ10年ばかりの間に、日本においても、がんの痛みのコントロールの重要性が叫ばれるようになり、医療用モルヒネ消費量は、年ごとに伸びている。特に硫酸モルヒネが市場に出て

からはその伸び率がいちじるしくなった。ちなみに1998年度は、その10年前の1988年度に比べて約8倍になっている。

このような背景のもとに、日本においても、がんの痛みのコントロールに対する関心が高まり、これまでもかなり多くの書物が刊行されている。本書の著者である武田文和先生もこの分野で多くの著書を世に出しておられ、がん性疼痛のコントロールに関してはわが国のリーダーと言える。

本書は、武田先生が医学書院の「週刊医学界新聞」に1999年から2001年にかけて連載された「WHO がん疼痛救済プログラムとともに歩んで」と題した連続エッセイを中心にして、修正加筆されたものである。

先生のWHOとの関り、サイコオンコロジーへの関与、患者とのコミュニケーション、西太平洋地域でのプログラム展開、カンボジアのがん疼痛治療、など先生の世界的な広い視野とご活動の軌跡がよくわかり、教えられるところが多い。付録として、痛みのマネジメントが記載されている。これは厚生労働省・日本医師会編『がん緩和ケアに関するマニュアル』(日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団刊行、2002)からの転載である。このマニュアルは武田先生が責任者として作成されたもので、WHO方式がん疼痛治療法にそった国としてのマニュアルである。

以上のように、本書は日本のがん疼痛治療法の歴史と現状を的確にまとめた好著である。疼痛コントロールに関心を持つ医師、看護師、薬剤師、その他コメディカルスタッフにも広く読まれることを期待したい。M

● A5 頁224 2002年

定価(本体1,900円+税)

[ISBN 4-260-12464-1] 医学書院刊